

『ごもくめし』と2017年度の留学生

*Gomokumeshi and 2017 exchange students*伊藤 みちる¹¹大妻女子大学国際センターMichiru Ito¹¹International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：『ごもくめし』，大妻，良妻賢母，留学生

Key words : *Gomokumeshi*, Otsuma, "Good wives and wise mothers", Exchange students

抄録

大妻学院創立者である大妻コタカ先生の自叙伝『ごもくめし』は、学院の歴史や「良妻賢母を育てる大妻」という世評を培ってきた女子教育の理念が詳細に記されている。これまで『ごもくめし』は大妻学院傘下の生徒や教職員に読まれてきた他、2016年度より本学国際センター所属留学生の講読教材として利用され始めた。本稿では、2016年度に留学生が『ごもくめし』購読によってどのような影響を受けたかという報告^[1]に引き続き、2017年度の留学生が①どのような理由で本学を留学先として選んだか、②どのような留学生活を送っていたか、③『ごもくめし』講読の反応と感想、④本学に留学したことによってどのような意義を感じているかについて記録した。結論として、本学の留学プログラムは他大学のものより格段に小規模であり、物足りなさを感じることもあるようであった。しかし全体的に、留学生は明治時代に日本女性が結婚して家庭を築いてから、様々な困難を乗り越えて創立した本学に留学したことに関して、また本学での留学体験に満足していることが明らかになった。

1. はじめに

平成30(2018)年に創立110周年を迎える大妻学院は、明治41(1908)年、学祖大妻コタカ先生が24歳の時に開設した私塾をもとに発展してきた。昭和36年に大妻コタカ先生が執筆した『ごもくめし』には、コタカ先生の一人の女性としての一生や、「良妻賢母の大妻」という世評を培ってきた大妻学院の歴史、また学院における女子教育の基本理念が詳細に記載されている。この『ごもくめし』は、大妻学院傘下の中学・高等学校、大学・大学院の生徒や学生、教職員や保護者に広く読まれてきた。

大妻コタカ先生が自叙伝『ごもくめし』の中で説いた「良妻賢母」教育は、「良き妻」「良き母」「良き社会人たれ」という大妻学院伝統の理念として、21世紀現代の多様な生き方が求められるグローバル社会においても受継がれている。それは、いくら社会が変わってきたとはいえ、社会の礎となる人間を産み育てるのは女性であるということ

は変わっていないからである。とはいえ、現代の大妻女子大学に通う学生が、どのような人物を「良妻賢母」とするかは未知数である。多様な生き方が可能になった社会だからこそ、多様な「良妻賢母」像が誕生するのは当然である。しかし、妻になるからには、「悪い妻」よりも「良い妻」になりたいであろうし、母になるからには「愚かな母」よりも「賢い母」になりたいと思うのは自然であろう。ここで社会の変化の影響や個人の価値観が反映されるのは、「良い妻」「賢い母」の判断基準である。

19世紀から20世紀初めにかけて、東アジアが近代女子教育を唱え始めたころに生まれたとされる「良妻賢母」思想は、西欧の近代女性をモデルとする、近代の人権思想や近代ナショナリズムから生まれたものである^[2]。東アジアの日本・中国・韓国の3カ国ともに、それぞれが理想とする「良妻賢母」があるようであるが、中国の「賢妻良母」や韓国の「賢母良母」が子どもを産む役割を強調

する儒教的な「良妻賢母」であるのに対し、日本の「良妻賢母」には夫を支えながら近代国家を築くための基礎となる強い国民を育てることへの期待が含まれている^[3]。さらに、女子教育者であり実践女学園を創立した下田歌子先生は、妻となり母となるだけでなく、労働力としての女性の社会進出をも推進した^[4]。伝統的な大妻学院の「良妻賢母」は、大妻コタカ先生が「良き妻、良き母、良き社会人たれ」と学生を指導されていたことから、またコタカ先生自身も妻となつてから私塾を開き女子教育の世界へ参入したことからも、独立自活する婦女子を否定した漢学者の服部宇之吉の「良妻賢母」論^[5]とは距離を置き、手に職をつけ社会で活躍する女性の育成を説いていたといえる。

現代の日本で、未来の社会を担う女学生に「良妻賢母」をどう説くかという課題はあるが、現実的に、現在では日本女性が生涯にわたり様々な選択肢を自由に選び、妻や母にならない選択や、妻や母になつても職業を持ち働き続ける選択をする女性も増えてきている。そして一方で、世界の中で構築され一般化された『日本女性像』なるものも存在している。さらにその日本女性像を、中国・韓国をはじめとする世界に、もっともらしく広く知らしめているのが、必ずしも日本発信とは限らない映画やドラマ、アニメや漫画などである^[6]。つまり世界には、「自分自身に関連する事項の優先度は低く、男性に意見することなく従順で思いやり深い」という幻想的な理想像^[7]から、「20代で結婚したら仕事を辞め、子どもを産んで育てることに専念すると同時に、夫と義両親に尽くす」という現実的な日本女性像^[8]まで、様々な日本女性像が誕生している。

2. 目的

大妻女子大学国際センターは、2013年に設立された比較的新しい組織である。2017年度までに31名の留学生を受け入れ、日本語や日本文化などを学んできた。2017年度に本学国際センターに所属した留学生は、韓国から3名、中国から1名の計4名であった。本稿では、それら留学生4名が『ごもくめし』を講読した際の反応と感想、また大妻女子大学について何を学び、他大学でなく大妻女子大学に留学したことをどのように意味づけたのかを報告する。

大妻女子大学国際センター所属の留学生たちの実態については、実際に彼女たちと日常的に顔を合わせる関係者以外には、あまり知られていない。少子化が進む現代、日本全国の大学にとって留学生を誘致できるかどうかは、一定数の学生を確保したいと願う大学においてはまさに死活問題である。他方、アルバイトに精を出し、勉強の時間は圧倒的に少ない「名ばかり留学生」が増えているという現実もある。つまり一部の大学では、留学生を入学させた後、留学生を大学に通学させるという基本的な学生たらしめるための生活指導に骨を折らなければならない状況にあることも周知の事実である。そのため留学生の受け入れに慎重、そして懐疑的に成らざるを得ない状況がある。こうした問題が出来している中、徹底した出欠管理や生活指導を行う本学国際センター所属留学生の学生らしい生活ぶりも紹介する。

3. 方法

3.1. 方法

大妻女子大学国際センターは教育プログラムの選択必修科目として「日本文学（近・現代）」を開講した。2017年度留学生はこの「日本文学（近・現代）」で紹介する自叙伝・随筆の作品として『ごもくめし』を講読した。留学生は、留学中に全員が日本語能力試験のN1に合格しており、日本語能力は漢字2000字、語彙10000語を持っているとされるレベルであった。具体的には、新聞の社説や批評の読解、ニュースや講義の聴解も可能で、自然なスピードでの会話ができるなど、幅広い場面で自然に日本語を使うことができる。そのため『ごもくめし』の講読は、一文が長く、固有名詞が多く、読みづらいつと感じるであろうが、決して難しすぎる課題ではないと判断した。

『ごもくめし』を紹介する前に、近・現代の主な日本文学作家とその代表作品にひと通り触れた。坪内逍遙、二葉亭四迷、尾崎紅葉、幸田露伴、森鷗外、樋口一葉、国木田独步、泉鏡花、与謝野晶子、夏目漱石、芥川龍之介、永井荷風、太宰治、井上靖、有島武郎、武者小路実篤、谷崎潤一郎、三島由紀夫といった作家の作品に触れ、明治から昭和にかけての時代・社会背景を学んだ。上記に挙げた作家については、その作品の一部を必ず音読をして、作品の内容理解のために映画やアニメを鑑賞し、広く浅く日本文学を紹介した。その後、

大江健三郎や村上春樹、楊逸や金達寿、川上未映子や梨木香歩などの作品の一部を実際に講読し、現代文学に触れた。

常日頃、報告者は留学生たちから日本人女性や日本文化に関するありとあらゆる質問を受けていたので、彼女たちが何に興味と関心を持っているかは、おおまかには理解しているとの自負があった。しかし『ごもくめし』を講読する前に、再度日本人女性に対するイメージや日本人女性に対して思うことに関して聞き取りを行いまとめた(表1)。

表1. 日本人女性に対して思うこと・イメージ

日本人女性に対して思うこと・イメージ
結婚したら名前を変えないといけない
結婚したら社会で活躍できない
結婚したら夫に従順
結婚したら意志決定権がなくなる
女性として社会でがんばろうとする気力が少ない
韓国や中国よりも社会における地位が低い
男性より下の位置にいつもいる
グループで行動する
勉強しない
つまらない

上記の表1. から、留学生たちが日本人女性に対して決して好意的な印象を持っていないことがわかる。どうやら留学生たちにとって、日本人女性は結婚によって自由が剥奪されているように見えるようだ。本稿は、『ごもくめし』講読前にこのような日本人女性に関する先入観を持っている留学生が『ごもくめし』購読中に見せた反応を記録した。同時に、講読後に提出させた感想文の一部を引用し、『ごもくめし』講読前後でどのように日本人女性に対する印象が変わったのか、また『ごもくめし』から何を学んだのかも提示した。

3.2. 『ごもくめし』講読

1回90分の『ごもくめし』に関する講義を6回行った。留学生が慣れ親しんだ日本語読解のテキストや新聞・雑誌の記事で読む日本語とは違う古風な日本語が書かれているため、また一文がとても長いため、購読が難しく、初回から意気消沈モードに陥ってしまった。そのため、1回目の授業は、報告者が段落ごとにゆっくり音読し、漢字や語彙の意味を逐一確認し、内容理解の確認を行

った。その後、社会文化背景の説明を行った。そして『ごもくめし』数章を指定し、その数章を次の授業までに読んでくることを予習とした。2回目以降の授業では課題部分を報告者や留学生たちが音読し、語彙や内容の確認を行ったのちに、社会情勢や日本文化についての説明を行い、内容理解の確認や議論を行った。

3.3. 留学生について

(1) 日本語レベルについて

2017年度は、韓国から3名の留学生が4月から1年間と、中国から1名の留学生が後期半年間、大妻女子大学国際センターに所属した。彼女たちは、国際センターが教育プログラムとして開講している日本語と日本事情に関する授業を受講した。2017年度の3名の韓国留学生の日本語能力は、国際センター始めて以来の最高レベルで、文法や発音も含めて、日本語を非常に流暢に操った。そのため一般の学生と机を並べることに非常に高い関心を持っており、留学生と一般学生の交流に積極的な教員が担当するゼミに参加させて頂いたり、レポート提出のない体育などの正課科目を履修したりしていた。

もともと高度な日本語能力を持つ韓国留学生が、前期半年間の日本生活を送って更に日本語能力に磨きをかけてから、後期だけ留学してきたのが1名の中国留学生であった。その中国留学生も日本語中・上級レベルではあるが、初めての完全な日本語環境と3名の韓国留学生クラスメイトの日本語能力の高さに、最初のうちは戸惑いを隠せなかった。しかし、2017年度の韓国留学生の持ち前の優しさと寛容力、そして中国留学生のマイペースな性格が幸いして相まって、日本語・日本事情の授業の進行にはほとんど支障を感じなかった。さらに言えば、韓国と中国の複数国出身の留学生がいたからこそ、日本語を学ぶという共通項をもとに、活発な異文化交流が行われ、日本語・日本事情の授業にも様々な有益な影響を与えたように感じた。

(2) 留学生の生活

特に2017年度の韓国留学生は非常に活動的であった。彼女たち3人は同じファストフード店でアルバイトをし、アルバイト先で出会った他大学の日本人学生と仲良くなり、同時期に韓国から日本の他大学に留学している友人や、ワーキングホリデー

一で日本に住み始めた韓国の友人、観光旅行に来た親戚や友人などと、時には寮の門限に間に合わないこともあったほど、とにかく出歩いていた。

出歩くことが多くなると気になるのが、日本の交通費の高さである。留学生たちからの「夏休みに日本を安く旅行するにはどうしたらいいか」という切実な質問に、特急が使えないなどの規制はあるが格安にJRに乗れる「青春18きっぷ」を紹介した。実際に「青春18きっぷ」を使っても、せいぜい日帰り日光に行くくらいだろうと考えていた報告者は、夏休み明けに驚くことになった。東京から秋田までの移動や、一時帰国した韓国から格安航空で福岡まで飛び、福岡から東京まで重いスーツケースを二つ持ちながら一日で移動した留学生の「青春18きっぷ」の逸話は忘れることができない。留学終了直前には、本学の学生とイタリア旅行にも出かけていた。また彼女たちの一番のお気に入りには、神奈川県三浦市三崎港までの交通、三崎のレストランでの食事や施設入館料などの体験が含まれた「みさきまぐろきっぷ」であった。

(3) 授業への取り組み

常に出歩いていた印象が強かった留学生たちであったが、日本語・日本事情に関する勉強は真面目に取り組んでいた。もっとも、報告者は毎週全ての授業で課題を出していたので、真面目に取り組まないという選択肢はなかった。多くの課題と授業のスピードによくついてきたと今さらながら思う。またすべての留学生の関心事項は、年に2回行われる日本語能力試験N1に合格することであった。そのため特に厳しい日本語能力試験対策の授業では、毎週小テストを行い、試験1ヶ月前からは授業時間を延長するため開始時間を90分早めて2コマ連続して授業を行い、模試とその解説、また合格するための戦略的な問題の解き方などの講義を集中して行った。

1時限から始まるその授業には、必死に勉強してきた姿そのもので登校してきた。毎回ほとんどすべての留学生は化粧とコンタクトレンズなしで、それを隠すために帽子とマスクとメガネ姿で出席していた。その姿で1時限と2時限を過ごし、3時限には化粧をした見慣れた顔に変身を遂げていた。毎朝の日課である化粧すらする余裕がないほど勉強に必死で、コンタクトレンズが入らないほど寝不足の状態で頑張っていた。留学生の必

死の頑張りの成果は、本学国際センター所属留学生が日本語能力試験N1に全員合格という結果として出た。

(4) 歴史問題と靖国神社

日本と様々な歴史問題を抱える中国と韓国の留学生に対して、特に特別な思慮が必要なのは、本学に最も近い神社である靖国神社の扱いである。日本では、閣僚の靖国神社参拝に反対する中国・韓国の人々の報道などから、政治的な問題として扱われることが少なくない話題である。しかし本件は、中国・韓国の人々にとって、また彼らと日常的に交流がある日本人にとっても、政治的な問題というよりも、さらにもっとデリケートな事項であることは確かである。同時に、留学生によって反応はまったく異なるようでもある。中国・韓国留学生を抱える多くの大学や日本語学校の教員らによると、靖国神社は校外学習としての目的地にまず選択されないが、多くの留学生は行ってみたい場所として必ず挙げるという。自国でも日本でもこんなに大騒ぎする神社を是非見てみたいと思うそうである。靖国神社は、神社であると同時に、無料の日本文化行事を境内で開催する、留学生にとって非常に便利で有益な体験ができる場所である。また桜や紅葉も美しいため、魅力的なスポットではある。

しかしこの神社に留学生を連れていけるかどうかは、当の留学生が靖国神社参拝だけでなく様々な歴史問題についてどのような意見を持っているかに左右される。本学では毎年、中国・韓国留学生と日本人である報告者との間で、様々な歴史問題についてどのような意見を持っているかについて、探り合う期間が必ず存在する。直接的に靖国神社参拝や歴史問題に対する姿勢を問うことによって、議論が始まってしまうと取り返しのつかないことになるかもしれないとの危惧を十分に承知しているからこそ、お互いの発言の端々からまずは想像するのである。そのため報告者は、ある程度の信頼関係を留学生と築けた段階で初めて、歴史に触れて、靖国神社とは何なのかを説明し、靖国神社が開催する無料の日本文化行事についての紹介を行ってきた。

2017年度の中国・韓国留学生たちは、靖国神社自体に対し、それほど強い拒否感を示さなかった。彼女たちは、2016年度の中国・韓国留学生よりも

さらに抵抗感を持ちわせていなかった。そのため、彼女たちは報告者の知らぬ間に桜の時期も銀杏の紅葉の時期も靖国神社に行っていた。とはいえ、まったく何のわだかまりもないかといえそうでもなく、「みたま祭り」には行けないと発言していた。

(5) 2017年度の留学生の特徴

韓国留学生に一人、敬虔なキリスト教徒がいたのは2017年度の特徴であった。報告者は例年通り、来日したばかりの留学生に本学周辺の地理や名所旧跡を紹介しようとした。しかしそれよりも、彼女にとって心の平和を求める重要な場所であるキリスト教宗派の教会を見つけることを優先すべき状況を経験した。必死になって、彼女と一緒に教会を探したことも、留学生の生活ニーズは様々であるということ学ぶ良い経験となった。他の留学生が日本語能力試験N1の合格祈願のため、ありとあらゆる神社に参拝に行っていたが、キリスト教徒の彼女は神社には観光として一緒に行っても参拝はしないとのことだった。

今まで報告者が経験した留学生に共通していることであるが、2017年度の中国・韓国留学生は特に女性の権利や地位の向上に非常に高い関心を持っていることがたびたび見受けられた。そういった彼女たちにとって、日本の女性はがんばりが足りないと見えるようである。また母国に交際相手を残して来日する留学生も少なくなかったが、日本の男性は浮気をして女性を大切にしないから留学中に新たな出会いは絶対はないと言い切っていた。どこでその認識を得たのかと幾度となく聞いたが、日本人男性はそういうものであるという先入観は消えることはなかった。

下記では、このような留学生が『ごもくめし』を読んだ感想と、講読したことで本学への留学にどのような意味づけができたかについて報告する。

4. 結果・考察

4.1. 『ごもくめし』購読前の留学生

日本語能力試験が終わった翌週の「日本文学（近・現代）」の授業で、報告者は「今日はみなさんにプレゼントがあります」と宣言した後、おなじみの朱色クロス装丁の『ごもくめし』を留学生に手渡した。想像していたであろうプレゼントとはまったく異なる、なにやら気難しそうな本を手

渡され、一瞬驚きながらも、礼儀正しい留学生たちはお礼を述べた。「布のカバーの本は初めてです」や「高そうです」と発言する留学生に対し、報告者は『ごもくめし』は大妻女子大学創立者である大妻コタカ先生が書かれたものであること、市販されていないこと、大妻女子大学に留学しなければ出会わなかった本であることを伝えた。すると、やっと関心を持ってもらえたようであった。

大妻女子大学の留学生は、必ずしも本学の教育理念に賛同してはるばる外国から日本語・日本事情を大妻女子大学に学びに来ているわけではない。ここで、他の提携大学への留学も可能な中、なぜ大妻女子大学を留学先として選んだのか、という問いに対する留学生の返答を発言のまま以下のとおりまとめる。

表 2. なぜ大妻女子大学を留学先に選んだか

なぜ大妻女子大学を留学先に選んだか	4人中(人)
日本の首都東京にあるから	4
東京の中心にあるから	4
日本文化を体験できる美術館や劇場などが近いから	4
母国で通う大学の提携校の中でいい噂が一番多いから	4
母国で通う大学の先生のおすすめ	4
母国で通う大学の妻女子大学留学経験者のおすすめ	4
校舎や寮がきれいだから	4
留学中に履修できる科目が魅力的だったから	4
授業は厳しいが楽しく役に立つと聞いたから	4
日本語能力試験N1に合格できるから	4
日本語の先生の教え方が上手で、面倒見もよい	4
日本語の先生は日本語以外のことも何でも教えてくれる	4
国際センター事務部の面倒見がよい	4
友人が東京に住んでいるから	3
東京の中心にあるのでアルバイトを見つけやすいから	3
東京の中心にあるのでアルバイトの時給が高いから	3
留学する前に実際に大学見学に来て気に入ったから	1
女子大に通ってみたかったから	1
日本人の友達がたくさんできるから	0
歴史があるから	0
大妻女子大学の教育理念に共感したから	0

上記の表 2. を読み解くと、本学を留学先として選んだ理由は以下の 4 点にまとめられる。①東京の中心にあるため繁華街へのアクセスが簡単な大妻女子大学に留学すると、時給の良いアルバイトをすることができる。②授業は厳しいが目標である日本語能力試験 N1 に合格できる。③授業を

担当する教員と事務手続きを担当する事務員は優しく面倒見が良い。④新しくてきれいな校舎でアットホームな留学生活を送ることができる。

さらに、2017年度留学生のうちの一人は、留学先を決めるにあたり、本学に留学中の大学の先輩を頼りに韓国から見学に来ていた。実際に自分の目でいくつかの提携校を見て、本学の学生の雰囲気と、本学の施設と、先輩の話に聞く日本語・日本事情の授業内容に惹かれ、本学を留学先として選んだそうである。

そして次に、本学や本学の留学プログラムに対する要望などを聞いてみた。留学生の返答を発言どおりまとめ、以下に提示する。

表 3. 大妻女子大学への要望

大妻女子大学への要望
留学生の数を増やしてほしい
色々な国の留学生を増やしてほしい
校外学習の機会を増やしてほしい
大学のサークルに参加させてほしい
大妻の学生との交流機会がもっとほしい
授業やゼミを聴講させてほしい(日本人と授業を受けてみたい)
課題提出日が重ならないように先生たちで調整してほしい
学食の電子レンジの数を増やして欲しい

2017年度の本学国際センター所属留学生の要望をまとめると、不満が見えてくる。つまり留学生は、現在本学の国際センターが実施している留学プログラム(受け入れ)について、①留学生の出身国に偏りがあり、留学生数も少ない、②日本語・日本事情に関する授業は座学ばかりで校外学習が少ない、③正課の授業を聴講するなどしないと一般の学生と触れ合えない、④一般の学生は自分たち留学生に対する関心が低い、⑤日本語・日本事情の授業の課題提出日が重なり提出準備が大変である、⑥学食は混んでいて、コンビニ食を買ってきて温めるための電子レンジを使うためにいつも行列ができていて、と不満を持っていることがわかった。

4.2. 『ごもくめし』講読中の留学生

『ごもくめし』に書かれている日本語は、一文が非常に長く、漢字の送り仮名も現代とは異なり、明治時代の度量単位が使われていたりして、日本語を外国語とする留学生にとって、とても難解で

ある。また固有名詞が多く、地理や歴史に関する知識がないと理解が進まない。そのため報告者が様々な注釈を加え、時には留学生と議論しながら読み進めた。

2017年度留学生が大きな反応を見せたのは以下の6章であった。各章に対応する留学生の感想を提出のままに引用する。そのため日本語として不自然な言い回しや文法の間違いもあるが、それも国際センター所属留学生の実力として報告する。

(1) 二つある誕生日 (pp.18-19)

忙しい時期に生まれたコタカ先生が「こまった、こまった」と言われたため、コタカという名前がついたというエピソードが紹介されている章である。ほぼすべての留学生が『ごもくめし』の中で男尊女卑を感じた部分として、この章を挙げた。当時の女性の地位の低さについて言及する留学生もいた。

「コタカ先生は読者である私が判断することによって、不幸をわりとたくさん経験した方のように感じた。生まれる時から、女の子だからきっと歓迎されなかったはずであり、その親の「困る、困る」という言葉が名前になってしまいました。初めて設立者の名前を聞いたとき昔の人なのに、すぐ名前が洗練されたと思ったが、このような由来があるとは想像もしませんでした。」

「女性の位置が低かったと感じたところはコタカ先生の名前の意味の部分だった。先生のお父さんは先生が男の子ではなかったという理由で「コマッタ兒」という意味でコタカと名前をつけた。無論、その当時に田植をする家庭では女の子より男の子が必要だし、多くの人々が男の子を欲しがったかもしれない。しかし、私は女の子であろうが男の子であろうが、新しく産まれた生命は祝福を受けなければならないとおもう。また、お父さんは先生の入籍もしていなかった。これはまるで自分の子供として認めたくないと言うようで、私が先生だったらとても衝撃を受けたはずだと思った。」

「最初にコタカ先生のお名前を聞いて、昔の日本人の名前が漢字ではなく、カタカナになっていたし、コタカという発音上、日本人の名前にしては

かなり特異だと思っていたが、ごもくめしを読んでその名前の由来を知ることができた。その当時は農業社会だったため、力が強い男児がたくさん欲しがっていたので、女の子に生まれたコタカ先生を見て困るという意味でつけた名前だった。私はこの話を読んでとても胸が痛んだ。女という理由で自分の誕生を親が喜ばないで、困るという言葉が一番先に出てくるなんて非常に大きな差別を感じました。ある機関で1994年、韓国の三番目の子供の性比に対する調査を行ったのを見たことがある。普通の性比は自然的に1対1が出ると言うが、この当時、三番目の子供の性比は最もはなはだしい地域は3:1まで出た場合もあった。また、他のニュース記事では女兒2万人が中絶手術されたという内容を扱うほど韓国も男尊女卑思想がとてもひどかった。しかし、最近では女の子を好むというニュースがたびたび目につく。しかし、その実状は男子供より女子供が後に親をもっとよく看病して親孝行をするという内容だった。つまり、男の子はその存在だけでも誕生を喜んでもらえるのに、女の子は親孝行をするという理由があつてこそ誕生を喜んでもらうという意味だ。これはまた他の性の不平等だと思う。」

(2) 私の結婚 (pp.22-31)

2016年度に引き続き、留学生在が最もショックを受けていた章である。もっとも、盃を交わすだけで結婚が成立することについては、報告者の説明がないと理解できなかったようである。結婚が成立してしまっただけに驚いた留學生たちは、「は？」「なんでですか？」「ありえないです」「信じられません」と口々に発言していた。次第に、口を抑えたり、頭を抱えたり、顔をゆがめたりした状態で、留學生は微動だにせず、全身を耳にして報告者の音読を聞きながら、『ごもくめし』の文字を追っていた。

報告者が音読を中止せざるを得なかった場面がある。三々九度をしたことにより自分の結婚が成立してしまっただけに気づいたコタカ先生が突っ伏して泣いているエピソードである。1人の留學生が「コタカ先生がかわいそう」と泣き出した。涙と鼻水を拭うため、「誰かティッシュを下さい」と顔を上げると、他の1人の留學生も涙を浮かべていたため、2人で慰めながら泣いていた。泣いている2人の留學生を見て、1人の留學生は「私は怒

っています。怒りが強すぎて、泣けません。泣くより怒っています。」と発言していた。

このように、留學生の「かわいそう」というコタカ先生に対する同情と、現代では考えられないほど当事者の意志が重視されない結婚に対する怒りが、音読をした授業内で明らかになった。しかし以下の感想文を読むと、コタカ先生の言動に高い期待を持つようになっていたことがわかる。つまり、明治時代に職業を持っていた女性であるコタカ先生は、理不尽な結婚に反対の声を上げることができたはずであり、押し付けられた結婚に反対しなかったことが残念だと感じた留學生もいたようだ。

このようにかかなりのインパクトがあるエピソードが盛りだくさんの本章については、留學生は多くの紙面を割いて、感想を綴っていた。以下のとおり紹介する。

「その当時には女性は産まれた時も歓迎されない、結婚に自分の意識は入らない、仕事も自由にできない、大変な時期だったということが分かり、その中でも絶望しないコタカ先生が凄いと思った。」

「最初にショックを感じたのはコタカ先生はいきなり知らない人と結婚してしまったことだ。今から見ればどうしても納得できない話だ。それでもコタカ先生は文句を言ったり、断ったりすることもしなくて、そのまま運命を受けて、初めて出逢う人と結婚してしまった。」

「結婚が書いてある部分を読んだとき、いったいどんな方法でいつ結婚になったのか理解できなかったです。先生の解釈を聞いてから分かるようになりました。今、考えてみてもお酒を飲んだことで結婚が実現されるということがあまりにも衝撃です。さらに、合意もない結婚は言うまでもありません。やはり昔は男尊女卑で、女性はそのまま男がすることに付いていく存在だったと言えるでしょう。」

「女性の位置が低かったと感じたところは先生の結婚の話だった。先生は自分は何も知らないまま、従兄の紹介で知らない人と結婚することになった。これは、私には絶対有り得ない話で、何があっても逃げたはずだと思う。写真と先生を見比べると

ころや先生の意識を無視しながら話を進行させるところなど、この部分を読みながら本当に腹が立った。また、ただ同じ盃でお酒を分けて飲んだことで結婚することになったが、涙を噴き出すほど嫌がった先生が諦めて認める部分を見て女性の位置が低かったと感じた。私は結婚というのは自分の人生半分くらいを一緒に過ごせる相手を見つけ、お互いに責任を持てるか十分考えた後、自分の意識で選択することだと思う。そのため、先生が従兄に何も言わず認めて残念だと思った。」

「その日、初めて見た男が突然自分の夫と紹介された時、女性としてどれほど大きな恐怖感を感じたのか見当もつかない。まだ男と対話もやってみなかった少女が離婚した経験がある男のところに嫁に行くなんて、コタカ先生の人権は全く尊重されていないという感じがした。昔はみんなそうだったと言っても、胸の痛むことだと思う。そして、そのような現実を涙の数滴流して受け入れるコタカ先生の姿勢も非常に残念だった。」

(3) 塾から学校まで (pp.32-45)

コタカ先生が結婚してから家計の足しに始めたアルバイトや、趣味で始めた手芸の私塾が学校になるまでのエピソードが紹介されている章である。結婚を理由に仕事を辞めることに男尊女卑思想を感じるという留学生もいた。

またこの章で紹介されていた良馬先生のお兄さんとその子どもが同居することになったエピソードを読んでいるとき、留学生の顔が険しくなった。眉間にしわを寄せた者もいれば、眉毛を上げた者もいたし、ハッと顔を上げて音読を続ける報告者の顔を信じられないといった表情で見続けた者もいた。それだけこのエピソードは印象的であったようで、以下のように、良馬先生の言動に男尊女卑の姿勢が強く見られるとして、留学生は感想を書いた。

「先生が結婚して仕事を辞める部分で感じた。先生は結婚した後すぐ教えることを辞めたし、他の仕事を探す時も本当は経済的な理由だが、退屈だからという名目を作って夫の面子を考えなければならなかった。無論、妻が夫を考えるのは素晴らしいことだと思う。しかし、結婚したと言っても自分の仕事を辞める必要はないと思うし、妻は家

で家事、夫を世話をしなければならない存在ではないと思う。」

「コタカ先生に対する夫、良馬の姿勢だ。自分の元夫人の両親の墓を立てるとコタカ先生に経済的に難しくなると通報をしたり、自分の兄の子供たちを育てるから離婚しようと言う場面を読んで非常に大きな怒りを感じた。コタカ先生はご両親二人も亡くなって、新しい家族になった夫は普段何を考えているのかも知らず、いつもあり得ない通報をするということから、コタカ先生の人生はどれほどさびしかっただろうという気がした。そしてその寂しさを生徒たちを教えることで解消したのではないかと思った。」

(4) よい妻に (pp.162-163)

2016年度の留学生たちが本章を講読した際には、報告者はそこまで大騒ぎすることか驚いたが、授業が紛糾した。昨年度と比較するとおとなしかったが、それでも2017年度の留学生たちも、報告者が1回音読しただけでは、「結婚したからには仕事をやめて夫に尽くせと言っている」と正しく理解しておらず、説明が必要であった。本章でコタカ先生は、「結婚したからには夫婦共同の場として家庭を第一に考え、円満な家庭を築いてから社会の各方面で活躍すればよい」と述べている。決して、「社会に出て仕事をするのではなく専業主婦になれ」と説いているのではなく、「結婚したからにはよい妻、よい母、よい社会人として家庭を大事にしながら活躍するべきだ」と説いている旨を説明した。しかしそう説明してからも、「男性も家庭第一主義に生きているのか、女性だけが家庭第一主義に生きていくのはおかしい」と異議を述べていた。2ページに満たない短い章であるが、留学生にとって考えることが多い内容である。

「良い主婦、良い母親そして、良い妻としても完璧に役割をこなすことは女で生まれたら目指すことであります。けれども、決して容易に実現できないことだと思います。結婚していない21歳の私が言うことはおかしいが、経験もしていない結婚に対して恐れているため、その大変さが見えるため、非婚者が増えているのではないかと思います。」

『ごもくめし』を読む前には、よい妻とは何だろうかについて深く考えたことがなかった。なぜなら、私はまだ妻という単語より母の娘という単語が自然だと感じ、よい妻という言葉は私には遠い話だと思ったからだ。しかし、『ごもくめし』を通じて大妻コタカ先生の人生を読みながら、その当時の女性の位置とよい妻の意味について考えてみるようになった。」

「女性は結婚すると男性より犠牲が多いです。結婚をして良いことがあるのかわかりません。大学で勉強をした女性が、自分が好きな仕事をして、生きがいで、でも結婚したら仕事が一番ではなくて家庭を第一に考えなければいけないなら、結婚したい女性がいるのか。私は結婚したいと思いません。」

(5) 焦土から立ち上がる (pp.50-59)

大正 12 年の関東大震災による大妻の被災と学校再建に関するエピソードである。日本より地震を感じる事が確実に少ない中国・韓国からやってきた留学生にとって、現在通っている大妻が被災し、生徒に死者がでたということが、印象的だったようである。特に 2017 年度後期には、比較的大きな揺れを感じる地震が何度か続けて起こった。地震が起きた翌日に留学生と会うと、必ず地震の感想を伝えていた。

また東京に近い震源を持つある程度の大きさの地震の場合、中国・韓国でも東京で地震があったということが報道されるようである。心配して頻繁に連絡を寄越す家族や友人を、時に疎ましいと感じてしまう自身に驚いたという留学生もいた。「よくあることだから、大丈夫というのがめんどくさいです」「日本の地震に慣れすぎたということです」と発言していた。

「日本は地震の多い国だということはすでに本から知っていました。しかし、1 年間の留学生活で地震を感じたことが、4 回もなるとは予想できませんでした。韓国で暮らしていた時は地震はただ本に出てくる自然災害で知っていたために、地震の恐ろしさを自ら体験したことはなかなか貴重な経験です。最近 5 度の地震を感じたことがあります。幸いにもその時一人ではなく、日本人友達と一緒にでした。地震が多いため、教育もちゃんとな

っていると思ったのは、地震を感じや否や、日本人の友達は出口から確保しようとする動きを見せました。もし一人だったらただそのままこの揺れが終わることを願うばかりでいたでしょう。その翌日、韓国のサイトでは一日中、日本地震という検索語が 1 位になっていました。」

「ごもくめしを通じて、地震の残酷さを感じることができた。地震が起きると、単に地面が揺れて危険というよりも、自分の周りにある造形物が生命を脅威する凶器で変わるという事実が怖かった。生徒のうち、2 人は土砂に埋もれて一瞬にして命を失ったりする場面を読みながらある話が思い出した。日本の怨という概念と、韓国の恨という概念を比較した話だ。日本は昔から、地震や津波のような自然災害が多くて、どれほど一生懸命に生きていっても、結局は運がなければあっけなく死ぬというマインドが強いということだ。このような恐怖が怨という概念まで発展したのだ。一方、韓国の鬼たちは普通自分の個人的なことがあって人間に呪いを下した場合、成仏をして退治するが、日本の鬼は自分の不幸を他人のせいにして無差別的な呪いを下して消えない特徴がある。このような概念は日本のアニメにもよく現れて、例えばナルトに出てくる九尾の狐や巫女の矢に当たって封印された犬夜叉などが挙げられる。また、日本の漫画によく登場する巨大で手のつかない災難的存在、例えば、進撃の巨人やエヴァンゲリオン of の使徒などが自然災害の隠喩と考えられる。このような思想は別れるときに言う挨拶にもよく現れているが、米国の場合 good bye と、神の加護を祈って、韓国は無事に帰りなさいと挨拶する。これに対し、日本のサヨナラは左様であるならばという言葉から派生されて、主体的な決定よりは、どこか押されて別れるという感じが強い。」

(6) 外地の思い出 (pp.170-193)

2017 年度の韓国留学生は、靖国神社に花見に行くほど靖国神社の境内に入ることに関しては屈託がなかった。しかし日本の侵略戦争についてや、当時日本領土としていた「朝鮮」や「満州」という「外地」については、どのような感情を持ちどう考えているかについては、まったくわからなかった。そして 2017 年度の韓国留学生は、現代の日本語の中に「朝鮮半島」や「朝鮮漬け」などという

「朝鮮」という単語が使われていることに「それは戦争のときの昔の名前です」と疑問を呈し、現在は使うべきではないということを主張したこともあった。そのため報告者は、本章の「朝鮮」や「満州」コタカ先生の初めての「外地」への旅行が記録された箇所はどう反応するか、やや心配をしていた。

心配は杞憂に終わり、最初から最後まで、楽しそうに報告者の音読を聞いていた。報告者は韓国留学生に、本文に出てくる「慶州」や「大邱」、「釜山」や「仏国寺」の地名を韓国語での正しい現地呼び名で読ませてみたり、中国留学生に、「安東」や「奉天」、「撫順」や「吉林」の地名を中国語での正しい現地の呼び名で読ませてみたり、現在はどのような観光地になっているのかを説明させてみたりした。「昔の韓国や中国が知れて面白いです」と概ね好意的に読んでいた。中国留学生も、コタカ先生が満州を訪れた際に同行の先生がスリ被害にあったエピソードを読み、「日本よりも治安が悪いです、すみません・・・」と謝っていた。中国・韓国留学生は、日本に植民地化された現在の自国の領土を「外地」として訪れたコタカ先生の旅行エピソードを楽しそうに読んでいた。

「本の中の韓国が韓国ではなく、朝鮮であったことに時間の流れを感じました。先生が韓国に行かれたとき、日本から釜山(プサン)に船で渡って慶州(キョンジュ)に行きました。慶州でのコースはまるで小学校の時の修学旅行コースを見ているようで懐かしい気持ちになりました。先生はその時に聞いた韓国語の中で「チョンマンヘヨ(どういたしまして)」が気に入ったようです。外国人の韓国語を聞くと発音がとても可愛くて笑いが出てしまいます。私の日本語を聞く日本人の気持ちもこうか気になってきます。」

4.3. 『ごもくめし』講読後の留学生

『ごもくめし』講読を始めた直後は、難解な日本語で書かれた『ごもくめし』を嫌がり、うんざりしたそぶりを見せたこともあった留学生たちであるが、購読後は自らが通う大学の創立者が書いた『ごもくめし』1冊を読みきったことに充足感を感じ、それが自信となったようである。また大妻女子大学の歴史も教育理念についても何も知らずに留学してきた留学生たちは、留学を終える前

に留学している大学の歴史を知ることができてよかったと口々に発言していた。また創立者が女性であり、明治時代に数々の苦難を乗り越えて建てた大学に通っていることも、女性の社会進出に関心がある留学生たちにとって、大きな意義を感じる点であった。

「一番印象に残ったのは、女性の優しさ力である。「優しさ」というものは、女性の力である。優しくてあたたかい雰囲気を作る力を持っている人たちがいるこそ、社会は暖かくなる。コタカ先生はこんな「優しさ」の力を持っている人であると思う。だからこそ、今の大妻が出てきたでしょう。こんな本を読んで、こんなコタカ先生と出会うのはほんとに良かったと思った。」

「この本を読む前には、自叙伝は詰まらない本だと思った。なぜなら、知らない人の人生の話を読んで面白いわけがないと思ったからだ。しかし『ごもくめし』を読みながら、先生の話に共感したり、よい妻の意味について考えてみたりして本当に楽しかった。私が考えた結論は「よい妻とは、自分の夢と家族を同時に守ることができる人である。」ということだ。このような完璧な人がいるのか考えていたところ、私の母が思い浮かんだ。私の母は今自分が好きな仕事をしながら、いつも休む日に大掃除をするし、父の健康も気を付けているし、私とデートもしてくれるし、弟の学校クラスのお母さんの中で会長も担当している。私の母は家族を支えている存在に間違いのないと思った。私も将来には母のように、よい妻になりたいと思った。」

「学校の設立者について知る機会が少ないが、大妻コタカ先生の自叙伝を読む機会ができて嬉しいです。留学期間にしたことの中に自慢の種がもう一つ増えたようです。正直に交換学生プログラムを支援するため、大学の名前を見た時、大妻女子大学は名前から、お嬢様の学校のようなイメージがあり、良妻賢母の育成に向けた学校だと思われましたが、実は設立者の名字だったということに驚きました。また、これまで学校設立者に対する固定観念だとかお金を持っている知識層の人というイメージが強かったです。しかし、必ずしもそうに限らないと思ったし、本にどのような背景で、どのような過程で学校が建てられたの

か詳しく出ていて興味深かったです。」

「私が通う学校の創立者について知る事ができた。創立者がどのような意味を持って学校を設立したか、この学校が設立されるまでどれだけ多くの紆余曲折があったか知ってからはより感謝の気持ちで学校に通うことができるようになったと思っている。」

4.4. 大妻女子大学に留学してよかったと思うか

大妻女子大学・短期大学部に入学する正課の留学生と、国際センターに所属する留学生は、日本語能力や留学に対する期待、また本学を選んだ理由まで違う。正課の留学生は、主に日本留学試験を受けて、数ある日本の大学から大妻女子大学を選択し入学試験に合格し入学してくる。留学期間は短期大学部なら2年以上で大学学部なら4年以上となる。国際センター所属の留学生は、自国で通う大学のいくつかの留学提携校の中から本学を選び、本学が定める日本語能力に達する者のみが留学してくる。留学期間は6ヶ月から1年である。

本学に留学することで正課の留学生が期待するのは、就職に役立つ専門知識と学位の取得である。他方、国際センターに所属する留学生の期待は、日本語能力の向上に役立つ授業と、日本人学生との交流、そして日本文化体験と日本事情に関する知識の習得である。よって報告者を含む指導教員は、楽しくわかりやすい外国語としての日本語授業を展開し、忙しい本学の学生が進んで留学生と交流を持ちたくなるような機会を設け、少人数だからこそフットワークを軽く実施できる課外授業や校外授業を遂行するよう心がけた。

本学国際センターに所属する留学生の出身大学が持つ日本留学先の選択肢は数多い。その中で、留学プログラムが最小規模であるのが本学である。そのため母国での日本語クラスの一部がそのまま日本に移動し、場所が変わったものの、クラスメイトも母国の日本語クラスの仲間のみであったのが、2017年度前期である。多くの留学生受け入れ教育機関では、留学生の数が少なくても、留学生の国籍は複数であることが多い。そのため、2017年度前期は、決して留学生にとって魅力的な学習環境ではなかった。その後2017年度後期は、やっと中国と韓国からの留学生が所属するようになったものの、他の提携校へ留学した友人の話を聞く

と、やはり世界中から集まるある程度の人数が在籍する留学プログラムの方が世界中に友人ができるし、授業でもさまざまな日本語が聞けて楽しいようである。本学では報告者が、そのような他大学の留学プログラム情報を踏まえ、地理的・留学プログラムの規模的に、本学だからこそこできる授業や課外授業などを可能な限り行った。

上記「4.1.『ごもくめし』購読前の留学生」で、なぜ本学を留学先として選んだのか、『ごもくめし』を読む前の留学生の回答をまとめたが、彼女たちは本学の立地の利便性を日本の留学先として選択した理由に挙げている。ここでは『ごもくめし』を読んでから、大妻女子大学への考えは変わったか、他大学でなく本学に留学したことによどのような意義を見出しているかについてアンケートを行った。留学生の回答は以下のとおりである。

「コタカ先生という女性が明治時代に建てた大学に留学できてよかった。もっと前に知っていたら、もっとありがたかった。」

「大妻コタカさんがまだ生きていたら、絶対に会いたかった。コタカさんの愛がたくさんで留学して嬉しい。」

「日本の女性はがんばりが少ない人ばかりではないことがわかった。大妻コタカ先生は明治時代の女性の位置が低いときに、女性なのに、夫が死んでしまっても、地震で火事になっても、負けずにがんばってきた。このがんばりは私も必要だ。私も女性なので、大妻コタカ先生のがんばりの結果の大学に留学してよかった。」

「他の大学に留学したら、国際的な友達がたくさん持てて、授業も国際的な日本語に触れることができます。でも大妻では韓国で勉強しているときと同じクラスメイトです。でも大妻の先生は、生徒ひとりずつ丁寧に生徒の問題を知っていて、間違いをゆっくり説明してくれます。そして東京の中心ですから、美術館や江戸城や歌舞伎も行きやすいです。日本人の友達を作るのはむずかしかったですが、大妻の先生は一生の先生になります。」

5. おわりに

数ある留学先の中から本学を選び、2017年度に大妻女子大学国際センターに所属して、日本語と日本事情を学んだ4名の中国・韓国の留学生たちは、1年間あるいは6ヶ月の留学生活の中で、多くのことを学んだ。もともと留学生たちは、日本の留学先の大学である本学を、楽しく日本語を学ぶことができ、アルバイトをするにも遊びに行くのにも便利な立地であるから最高である、という基準で選んだようである。

2017年度の留学生たちにとって、「日本文学（近・現代）」の授業で講読を行った『ごもくめし』は、留学生たちに本学の歴史や教育理念について理解を深める機会を与えた。つまり『ごもくめし』を講読したことにより、留学生たちは自ら選んだ留学先である本学の歴史や創立者である大妻コタカ先生の苦勞と教育に対する情熱を知ることができたようである。特筆すべきは、留学生が創立者の思いを学んだことで、大妻女子大学への留学について、利便性がいいというだけではない特別な意義を見出していたことである。

留学生たちは、他大学と比較し本学の必ずしも魅力的とはいえない日本語学習環境の中で、日本語だけでなく、日本文化や日本事情を学ぶ機会を貪欲にうかがい、多くのことを経験した。また留学生を担当する教員に限られているため、教員側としては留学生一人ひとりの様子について体調まで手に取るようにわかるようになり、口うるさくも射た生活指導が可能となっていた。そのため、留学生は注意をされても本当に自分のことを思ってくれての注意だと気づいていたようである。結果として、留学生と報告者を含めた教員の間に強い信頼関係が生まれ、留学生は母国へ帰国しても、日常の報告や日本語に関する質問など頻繁に連絡を寄越してくる関係を保っている。

本学国際センターが受け入れる留学生は、中国・韓国出身が多く、今までの報告者の経験では、女性の権利と地位の向上に大きな関心を抱く者が少なくない。感受性が非常に豊かな留学生たちは、『ごもくめし』のいくつかの章では、コタカ先生に感情移入し、悲しみの涙を流したり、明治時代の女性が経験せざるを得なかった理不尽な出来事に、怒りのために震えたりしていた。そのような留学生に『ごもくめし』を講読させ、本学の歴史や大妻コタカ先生の教育に対する熱意などを紹介

することは、他大学との差異を図るためには非常に効果的である。

これまで『ごもくめし』は大妻中学校・高等学校などの大妻学院関係者を中心に読まれてきた。そこでは本学の歴史や教育理念、また明治時代に学校を建てた大妻コタカ先生の一人の女性としての一生を知ることができる。その点で、本学留学生に「他大ではなく大妻に留学したことの意味」を考えてもらい、特別な意味づけを見出してもらうための有益な講読教材でもあることがわかる。

全体としては本学での留学に満足して帰国した留学生であるが、他大学の留学プログラムの情報から客観的に判断すると、本学の留学プログラムが物足りなく感じるのも確かである。今後とも本学国際センター教育プログラムへ留学生の受け入れを継続するのであれば、本学の地理的特徴を生かした校外学習や、本学の日本人の学生と机を並べることでできる機会を作り、本学だからこそ実行できるさらに魅力的な留学プログラムを提供していくことに尽力すべきだと考える。

参考文献

- [1] 伊藤みちる『『ごもくめし』と留学生』『人間生活文化研究』2017, pp.645-653.
- [2] 陳延媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』勁草書房 2006.
- [3] アジア・ジェンダー文化学研究中心 奈良女子大学『ニュースレター』7. 2008.
- [4] 伊藤由希子「下田歌子の「良妻と賢母」(1)」『女性と文化：下田歌子研究所年報』2015, pp.128-142.
- [5] 韓韓「中国近代女子教育における日本受容」博士學位論文名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 2014.
- [6] 小倉紀蔵『ハイブリッド化する日韓(真横から見る現代)』エヌティティ出版 2010.
- [7] 芳賀理彦「アメリカにおける宮崎駿の受容—日本文化と歴史の新しい表象—」『千葉大学比較文化研究 2』2014, pp.73-102.
- [8] 濱口桂一郎『働く女子の運命』文藝春秋 2015.

Abstract

Otsuna Women's University will celebrate its 110th anniversary in 2018. Gomokumeshi, the autobiography of the founder of Otsuna, Mrs. Kotaka Otsuna, details Otsuna's history as well as Otsuna's principle of the education for women, for which it has earned the reputation of raising "good wives and wise mothers". Gomokumeshi has been widely read not only by pupils and students, but faculty and administrative staff members. Additionally, from 2016, Gomokumeshi was listed as one of the mandatory readings for the exchange students who came to study Japanese language and culture at Otsuna. This article points out the following: why they chose Otsuna to study Japanese language and culture; the aspects of the exchange students' Otsuna life; their views of, and reaction to reading Gomokumeshi; and the overall significance of studying at Otsuna. In conclusion, although the exchange students were unsatisfied with Otsuna's particularly small Japanese language study program, as well as paucity of interaction with Japanese Otsuna students, many of them were happy with the overall experiences at Otsuna, which is strategically located in the centre of Tokyo, and which would have allowed them to experience Japanese cultural events. It was clear that the exchange students were considerably impressed by the fact that Otsuna was established by a married Japanese woman who overcame all the struggles and challenges.

(受付日：2018年10月9日，受理日：2018年11月14日)



伊藤 みちる (いとう みちる)

現職：大妻女子大学国際センター専任講師

英国ウォーリック大学大学院社会学研究科社会調査学専攻修士課程修了。
専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会問題。

タイ王国国立ラジャパット大学ペップリーウィタヤロンコーン校や西インド諸島大学（ジャマイカ）などの日本語コース運営に携わった。現在，大妻女子大学国際センター教育プログラム日本語・日本事情コースの運営を担当する。